魔王様の大冒険

東雲なぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王様の大冒険

【Ｎコード】
Ｎ６２１８Ｙ

【作者名】
東雲なぎ

【あらすじ】
大魔王サタン。人々から恐れられる存在。
――のはずだったが、いつまで経っても勇者は城へと乗り込んではこなかった。
暇を持て余したサタン。中間管理職のルシファーも全然構ってはくれず、ついにはしびれを切らしてしまった。
そんなサタンの取った行動は……？

＊＊＊出来るだけ毎回挿絵入れるようにしています。処女作です。

色々読みにくい部分等あるかと思いますが、読んでいただけたら幸いです＊

プロローグ

「なぁなぁ、中ボスなルシファー君……俺さぁ、気付いたんだけどさぁ……超暇だわ」

クルクルと動物の生き血が入ったグラスを回しながら、明後日の方向を見つめつつ魔王サタンは寂しげに呟いた。

「勇者、全然こねーじゃん」

生き血を一気に飲み干し、タンッ！とテーブルに八つ当たりするかのようにグラスを置く。

「魔王の城にすら辿り着けないとか……つまらないと思わないかね、中ボスなルシファー君」

「その呼び方やめてください」

ルシファーと呼ばれた男はマントを翻し、不機嫌そうに部屋を出ていってしまった。

「つれないなー」

はぁ、と溜め息をつくと……サタンは人間界を監視するモニターを覗き込んだ。

「どいつもこいつも弱っちいな……最初のボスでさえ突破出来てる奴少ないじゃねぇかよ。俺いつになったら勇者と戦えんの？」

苛々しつつ、各地の勇者の様子を観察していると、サタンの目に

留まった一人の勇者がいた。

「……こいつ、可愛いな」

シルビア＝ライトネス。Ｌｅｖｅｌ８。職業「かけだし勇者」
さらさらな赤い長髪、長い睫毛に大きな瞳、胸は小さめだが、なかなか良い形をしている。

「俺、どうせならこういう可愛い子と戦いてぇな～、んで、どさくさに紛れて乳揉んだり尻触ったりあわよくばアレをこうしてソレをああして…」
「サタン様」
「……あ？」

サタンの桃色な妄想はルシファーの言葉によって遮られた。憤慨したサタンはプルプル震えながらルシファーを睨んだ。

「東イリアス地方の魔物が減ってきているようです。召喚してください」
「くそっ……俺は召喚術師じゃなくて大魔王だってんだよ」

この世界の設定上、魔物を増やすことが出来るのは所謂ラスボスのサタンだけなのである。

「大体魔物を増やしたら余計勇者来てくれなくなるじゃん、いいよもう増やさなくて…」
「早く任務を遂行してください」

表情ひとつ変えずにルシファーはぴしゃりとそう言い放った。つくづくつまらない男である。

「ったく、しょうがねぇなぁ……」

サタンは魔方陣を描くとゴニョゴニョと呪文を唱えた。

「出でよ！我が下部達！」

サタンが右腕を振り上げると魔物が魔方陣の中心からわらわらと沸きだす。

＞ｉ３５３８５―４４５２＜

「……出たよ、魔物」

最初こそ決めポーズ決めて「今日の召喚は一段とかっこよく決まったゼ！」とか言ってたサタンも最近はすっかり飽きてこの通りである。

＞ｉ３５３８９―４４５２＜

「ありがとうございます。では、私は魔物を東イリアス地方に送り届けて参ります」

「へーい、気をつけてなー」

……本当につまらない毎日だ。

ラスボスって響きに憧れて頑張ってこの地位に就いたのに勇者が来なきゃなんの意味もない。

転職しようかなぁ……村人Ｃあたりに……。

絶望の眼差しで見つめた先に映ったモニターの中で、シルビアの笑顔が光っている。

「……そうだ、いいこと思いついたぞ」

サタンの濁った瞳はみるみるうちに輝きを取り戻し、悪戯っぽく微笑みながら人間界へと続く階段へと向かう。

「俺、魔王だってことは隠しつつシルビアの仲間になって、この城まで一緒に冒険してあげればいいじゃないか……！」

――……こうして、異色の大魔王の大冒険が始まったのである。

第1話　接触

「待っててくれよ、愛しのシルビアちゅわーん！！」

周りにお花を散らしつつ、サタンはルンルンと人間界へと続く階段を降っていた。

「サタン様」
「ル、ルシファー……！」
「どこへ行かれるのです？」
「え、い、いや…暇だったからさぁ、ちょっと人間界降りて人間共を混乱させてこようと思ってだな……」
「サタン様直々参らなくても、その様なことならこのルシファーにお任せを」
「いや、いいから！　俺の出番奪わなくていいから！　空気読めよお前いい加減！」

苛々が募っていたサタンはバシッとルシファーを叩いた。

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああsdfgh.jきおlp;！！！！！」

ルシファーはサタンの突っ込みで吹っ飛ばされて棚へと突っ込んで力尽きた。

「しまった！俺、超強いんだった……！軽く突っ込みを入れただけだったのに」

サタンの肩書きは「ラスボス」なので、設定上、どのボスよりも

強い。勿論、「中ボス」のルシファーなんかは粉砕できる力を持っていた。

「ま、いっか。うっさいのいなくなったし。あとで誰か回復呪文かけてくれるだろ」

サタンはくるりと向きを変え、改めてルンルンと階段を降って行った。

――……人間界。緑で溢れていて妙に空気が澄んでいる場所。

俺達魔族にとっては心底居心地が悪い。

「シルビアちゃんは確か……エイビスの町の武器屋で剣を物色していたはずだったな」

俺の下半身の剣じゃだめかな？とか桃色の妄想を膨らませてニヤけつつ、サタンはエイビスへと向かった。

エイビスは森のはずれにある小さな町だった。所謂、勇者たちの冒険がまだ序盤の頃に立ち寄る場所だ。

「おうおう、弱そうな奴等がたくさんいるゼ……ん？」

町人がサタンを見てザワつき始めている。翼と角は隠しているものの、着ている洋服や禍々しい装備品の数々を見て異端と感じ取ったのだろう。

「おい……あいつ、なんかおかしなオーラ放ってないか……？」

「まさか、魔族？」

「いやだぁ、薄気味悪い」

そんな声がちらほらと耳に入った。おいおい、町到着後二分で正体がバレかかっているぞ。

ごちっ

その時、町の子供がサタンに向かって石を投げつけた。
え？何こいつ死ぬの？思わずサタンはギロリとその子供を睨んだ。

「こいつ、大魔王だ！！」

突如、石を投げた子供が叫んだ。
え？あれ？身バレした。早々に。なんで？

「ま、魔王ですって……！」
「近寄らない方がいい」
「町から出ていけ！！」

町人達みんなして石を投げてきた。

でも、全然痛くない。石程度じゃダメージ受けないし。あ、でも怪しまれないように痛がるべきか？

「やめろ！」

俺と町人達の間に割って入ってきた一人の女剣士。

「余所者だからってそんな扱いするのはやめろ！」

さらさらな赤い長髪、長い睫毛に大きな瞳。

「大丈夫か？」

胸は小ぶりだがなかなか良い形をしている。

俺の顔を覗き込むためにしゃがんだ瞬間、それはぷるりと揺れた。

「超大丈夫です！！」

俺は思わずその女剣士……改めシルビアの手の甲にキスをした。

まさかシルビアが助けてくれるとは思わなかった。これが運命ってヤツか……！

＞ｉ３５３９０―４４５２＜

「うわあああ！　何すんだ変態！！！！」

思いっきり鳩尾をド突かれはしたものの、痛くない。むしろ気持ちいい。

「あ、ソレもっとやっていいです」

「うわあああああ！　何こいつケロッとしててキモい！！！！」

後ずさるシルビア。町人達も変なことに関わるまいとさっさとどこかに行ってしまった。

「さっきは助けてくれてありがとう。取りあえず俺と宿屋行かない？」

「い、行かない！　私はこの先のヘイオスの沼地の大蛇退治に向かわなければならんのだ……変態に構っている暇はない！」

「あぁ～！　あの大蛇ね！　俺も仲間に入れてよ、大蛇退治！」

「……は？　遊びではないのだぞ。素人が命を粗末にするな」

「えー。俺強いよ？　超強いからさ。ほんとほんと」
「断る」

シルビアはサタンに背を向けると一人でさっさと町を出て行ってしまった。
……確か、大蛇はＬｅｖｅｌ１６のボスだったはずだ。Ｌｅｖｅｌ８のシルビアじゃ敵いっこない。
そこでだ。俺が救世主役をしよう。

大蛇ＶＳシルビア→シルビア苦戦→俺助ける→サタン様かっこいい→共に宿屋へ→ゴールイン

――完璧じゃないか！
サタンは赤いマントを翻し、颯爽とシルビアの後を追ってヘイオスの沼地へと向かった。

第2話　仲間

「……何故付いてくる？」

バレた。尾行開始わずか三分で即効シルビアにバレた。シルビアは眉間にしわを寄せて怪訝そうにこちらの様子を見ている。

「いやぁ、俺って可愛い子がいるとついつい追いかけてきちゃうんだよなぁ、本能的にさぁ」

「……」

＞i35394―4452＜

シルビアは迷惑そうにしっしっとまるで動物かなんかを追い払うかのような仕草をした。何それ犬扱い？　そういうの嫌いじゃないぜ？

「……」

「……」

「……いい加減にしてくれないか？」

「え？　なにが？」

「お前、大蛇がどれだけ危険かわかっているのか？」

「勿論！　だって俺が呼んだんだし……」

「呼んだ、だと？」

「あ、いや……こっちの話し」

「お前……何者なんだ？」

シルビアは更に怪訝そうな顔になった。いけないいけない、口を滑らせないようにしなくちゃな。

「俺ねぇ、魔法使いやってるんだわ。前まで凄腕の勇者に雇われてたんだけどさ、今は訳あって一人旅してる」
「魔法使い……だと？」
「あ、信じてない？　じゃあちょっとだけ魔法を見せてあげるよ」

サタンが指をパチンと鳴らすと近くにあった森一帯が轟音と共にすべて吹き飛んだ。土埃が辺り一面に舞う。
シルビアは大きな瞳を更に大きくして、口をパクパクさせていた。
「どう？　俺強いだろ？」
「バカかお前は！？　森が吹っ飛んでしまったじゃないか！！」

シルビアは思わずサタンの後頭部をグーでガツンと殴り付けた。
なかなか暴力的なお嬢ちゃんだ……良い拳してやがる。
――が、防御力的な問題で何もかもが気持ち良く感じてしまう。
あぁ、もっとやってくれ。

「な！　お前さっきから痛みというものを感じているのか？」
「えっ？　あ、あぁ、俺さぁ、あ、アレ……アレなんだわ！　ドMなんだわ！」
「や、やっぱり変態なのか……っ！！」

シルビアは汚物を見るような目でこっちを見ている。
俺、そういう目嫌いじゃねぇわ。

……あれ？さっきは咄嗟にドMとか言っちまったが俺ってもしかしてマジで……

「とにかく、私はお前と共に行動する気はない」

「そうなの？　俺はシルビアちゃんと行動する気満々なんだけどなぁ～」
「……っ！　お前、何故私の名を知っている！？」
……俺は一体何度目の墓穴を掘っちまったんだろうか。
シルビアのサタンを見る目は疑いから怯えへと変わっていた。
……うーむ、流石の魔王様でももう言い訳が出てこねぇぞ。
「お前、何かを隠しているな？」
「おいおい、ドMってことまで暴露させておいてまだ俺のこと疑って……」
「まさかとは思うが、さっきの子供が言った通りお前本当は魔王なのではないだろうな？」
おい。
人間界で大人気のアニメ「名探偵コナソ」でもまだ主人公の招待バレてねぇっつーのに、いくらなんでもこの展開俺の正体バレんの早過ぎだろう？
サタンの額に冷や汗が滲みだした。
「……ふっ、まさかな。こんな変態が私達勇者の宿敵なはずがない」
シルビアは自嘲しつつ、そう言った。
――セーフだ。
自己解決してくれたぞ。俺、変態でよかった。
「じゃあな。もう会うこともなかろう……付いてくるなよ？」

シルビアはギロリとサタンを睨み付け、くるりと方向を変えて足早に林の中へと消えた。
つれないなぁ。ルシファーみたいにつれないぜ。
サタンは仕方なくシルビアとは別行動でヘイオスの沼地へと向かった。

沼地ではヘドロの魔物や小さな虫やヘビの魔物で溢れていた。そいつらの亡骸がそこかしこに転がっている。きっとシルビアが戦闘した痕跡だろう。剣の腕はＬｅｖｅｌ８にしてはなかなかのようだ。

「確か、このでけぇ木を潜った辺りにボス配置したはずだったな……」

――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオォ……！
けたたましい轟音が沼地の淀んだ空気を振動させる。きっと大蛇が移動するときの音だろう。それほどまでにヤツはでかいのだ。

「もう始まってるのか。シルビアちゃんは無事かな？」

大蛇“キングスネーク”は、シルビアを胴体でぐるぐる巻きにして、グイグイと締め上げている最中だった。チロチロとした舌先が今にも鼻先に触れそうになっている。
シルビアは抵抗しようと手に持った剣を振りかざすものの、抵抗も虚しく剣は手の平から地面へとするりと抜け落ちてしまった。予想通り苦戦中ってところか。

「……ぐぅっ！」

それでも抵抗しようと、足をばたつかせる。

もう少しアングルさえ良ければスカートの隙間からパンツが見えそうだ……！

サタンはごくりと生唾を飲み込んだ。そして、大蛇にこっそりとアイコンタクトを送る。大蛇はコクりと頷くと、シルビアの足に巻き付き、逆さ釣りにしてみせた。

「水玉！」

「ちょ、へ、変態！　見てないで助けろっ」

「ＯＫ、ＯＫ。ただし、条件がある」

「な、なんだ？」

「俺をパーティーに加えてくれ」

「く……っ！　仕方ない……加えてやるから手を貸してくれ！」

「よしきた！！　超貸す！！！　どっせえええぇえい！！！！！」

サタンが両手を振り上げると沼地一帯に閃光が走り、物凄い爆発音が響き渡った。辺り一面に煙りや埃が舞い上がり、たんぱく質の焼け焦げる独特の嫌な臭いが漂う。

「な……こ、今度は沼地ごと吹き飛んだぞ！？　お前、一体どんな魔法使ったんだ！？」

「言ったじゃん。俺強いよって」

サタンは髪をかき上げ、ふふんと自慢げに笑って見せた。

そして、シルビアはそんなサタンの尻を思いっきり蹴り上げる。

「無駄なものまで破壊するなと言っているんだ！！　罪のない動物達まで巻き込んで……！」

シルビアは涙ぐみながら力説する。少々乱暴者のようだが、心は優しいようだ。これでこそ俺の嫁になる女である……！

「すまない、君を守ろうと思ったら……つい、加減というものを忘れてしまった……」
「御託はいい。気色悪いやめろ」
シルビアは顔色ひとつ変えずにぴしゃりと言い放った。
「次また無駄に破壊行為を行ったらお前をパーティから即はずすからな」
「ってことは、俺を仲間って認めてくれたんだね……！？では、さっそくよろしくねのキスを……」
ぐしゃああっ！
シルビアは思いっ切りサタンの顔面を殴った。しかも、グーでだ。痛みは感じないものの変な音がした。
この子……多分剣より拳の方がいい線いってる。
「さっさと次のダンジョン目指すぞ、変態」
――……こうして、かけだし勇者と変態魔王の奇妙な二人旅が始ったのであった。

第3話　双頭獣

「ねぇねぇ、まだ戦うの？」

サタンは木陰に座り込み、頬杖を付きながらフィールドの魔物と必死に戦うシルビアを眺めていた。避けて通ればいいものを……シルビアは片っ端から雑魚敵に勝負を挑んでいる。

「しょうがないだろう、Ｌｅｖｅｌ上げをしっかりやっておかないと強敵に敵わないからな……お前もそんな所に座ってないで戦え！」

「はいはーい」

サタンは立ち上がりその辺徘徊していたオオカミのような獣系の魔物に向かって拳を振り上げた。その瞬間魔物は踵を返し、全速力で逃げ出して行った。

「んだよ、なっさけないな～」

「……お前、一体Ｌｅｖｅｌいくつなんだ？」

「それはねぇ……ヒ・ミ・ツ」

ウインク飛ばして語尾にハート付けるような話し方したのが気に障ったのか、シルビアはこっちを思いっ切り睨んだ。……でも、言えねぇよ。Ｌｅｖｅｌ１００とか言えねぇよ。

その時、ヒュン！　っと風を切る音が聞こえた。次の瞬間、キャッとシルビアの短い悲鳴が響き、頬に切り傷が一直線に出来た。

――カマイタチか？

辺りを見渡すと鳥系の魔物が上空からこっちの様子を窺っていた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……私としたことが油断してしまった」

シルビアは頬から出た血液を手の甲で拭い、剣を鞘から抜き、スッと腰を落として構える。

“風刃（ウィンドブレード）”

勢いよく剣先が上空に向かい弧を描き、風の刃が魔物に向かって飛んでいく。それは見事に命中し、魔物は地面へと落ちてきた。

その瞬間、シルビアは淡い光の柱に包まれる。どうやらＬｅｖｅｌが９に上がったようだ。

「おめでとう！」

サタンが拍手しながらそう言うと、シルビアは照れているのか、目を伏せながら小さな声で「ありがとう」と呟いた。

「さて、そろそろ休憩といかないかな？　シルビアちゃんも疲れただろう」

「そうだな……最寄りのコルデスの街で少し休もう」

「……と、その前に」

＞ｉ３５４６６―４４５２＜

サタンはシルビアの頬に向かい手を伸ばす。白く柔らかい光が放たれ、頬にできた切り傷はスーっと消えてしまった。所謂“回復呪文”ってやつだ。

「可愛い顔に傷が残らないように、な」

「あ……す、すまない」

シルビアは再び目を伏せ、傷が消えたことを確認するかのように頬を手で擦っていた。

――それから1時間ほど歩き、ようやくコルデスの街へと辿り着いた。

そこは、そこかしこに花が咲いていて、甘い香りで溢れていた。エイビスよりも栄えているようで、武器屋に防具屋、よろず屋にアクセサリーショップにカフェ……色々な店が並んでいる。民の数も多く、活気に満ちていた。

「噂には聞いていたが、綺麗な街だな」

シルビアはきょろきょろと辺りを見渡し、目を丸くしている。

「私、武器屋で剣を見てくる」

「え、あ……ちょっとシルビアちゃ……」

サタンの話しが終らないうちにシルビアはさっさと人混みの中へと消えてしまった。迷子にならなければいいが……。

しかし、年頃の女子が真っ先に武器屋とは……でも、それがシルビアちゃんらしいのかな。

「さーて、俺はどうしようかな」

大きく伸びをして辺りを見渡す。近くに咲いていた大きな紫色の花から漂う芳香がサタンの鼻孔を刺激する。花の香りはどうも苦手だ……。とりあえず、建物の中に避難しよう。

サタンは近くにあった建物の中に入った。

ドアを開けると、むわっと酒の匂いがして、男達の妙にでかい笑

い声がこだまする。特に確認せずに入ってきてしまったが、ここはどうやら酒場だったようだ。サタンはとりあえず部屋の隅に置かれている酒樽の上に腰を下ろした。傍のテーブルに座って飲んでいる声の大きな男2人組の会話がいやがおうにも聞こえてくる。

「アイオーンが魔物に殺られちまったそうだぞ」
「なんだって？　あの凄腕の剣士がか？」
「あぁ、何やら双頭獣がこの辺に出没しているらしいんだ」
「そりゃあ、恐ろしいことだな。いつ死んでもいいように今のうちに酒をたらふく飲んでおかねえと」
「がっはっはっは！　それくらいしか俺達には楽しみなんてないしなぁ！」

——双頭獣？
サタンは耳を疑った。そんなもの召喚した覚えがなかったからだ。
“誰か俺以外に魔物を召喚できるヤツがいる”

そんな考えがパッと脳裏を過る。変な胸騒ぎを感じて酒場を出ようとした瞬間、ちょうどドアから入ってきた男にトンとぶつかってしまった。

「おっと、すまな……」
「なにしやがんだテメェ！！」
「——へっ？」

サタンは身長2メートルはあろう大男に胸倉を掴まれてそのまま床に叩き付けられた。
え？　いったい何事？
痛みはなかったものの、あまりにも突然のことすぎてサタンはそ

の場からしばらく動けず、目を頻りに瞬きさせた。

「アイツ、確かアイオーンとよくつるんでた……」

「アイオーンが死んで苛々してんだろ。おー、恐い恐い。目ぇ合わせるんじゃねぇぞ」

さっきまで賑わっていた酒場が一瞬にして静まり返る。

大男はウォッカを注文し、空いていた席にどしりと腰を下ろした。ボロボロのマントを身に纏い、手入れされていないであろう長髪をかきあげ、苛々とした表情で目を伏せている。

背中にバカでかい大剣を装備しているところから、きっと剣士だろう。

その時、大男が「何見てやがる」と言わんばかりにこっちを睨んだ。

サタンは面倒な事に巻き込まれるのが嫌だったので、そっと酒場を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6218y/

魔王様の大冒険

2011年11月21日20時56分発行